

バナナでクギの打てる世界

秋田純一（8.12.14 回参加）

「氷点下20度の世界では、バナナでクギが打てます」

むかし、こんなCMがあった。たしかエンジンオイルのCMだった。

「バラの花も、この通り(手で粉々にする)」

「でもモーター・ワンなら大丈夫」

たしかこんなフレーズだった。

バナナでクギが打てて、バラの花がパリパリになるような、そんな世界が地球上にあるんだろうか。たしかにあるかもしれないが、なにか遠い世界のことのような気がしていた。そんな折、湧源クラブで「みんなでオーロラを見に行きませんか？」という誘いがあった。オーロラ。

なにか不思議と、神秘的な響きをもつ言葉だ。普段の研究生活に疲れを感じていたちょうどその頃に聞いたこの言葉に、なにか、忘れていた「わくわくする気持ち」を思いだした気がした。

もちろん、実際にオーロラを見るためには、遠くの国へ行かないといけないわけで、お金もかかるし時間もいる。学生は基本的に貧乏だし、さらにお誘いの3月中旬は、ちょうど春の学会シーズンのど真中だ。

でも、そういう現実的な問題は、なんとかなるものだ。お金はためればいいし、時間は前後に仕事をまわして、なんとか空ければいい。その頃の自分にとって、「オーロラ」という言葉は、そこまでさせる魅力をもっていた。

というわけで、前置きが長くなったが、なんとかお金を工面し、日程も都合をつけ、やってきたのが関西空港。ここから飛行機に乗って、はるか北欧、フィンランドへ向かう。フィンランド。

正直言って、あまりなじみのない国だった。北欧のスカンジナビア半島の国だけど、スウェーデンとノルウェーとの位置関係がいまいちよくわからない。

飛行機は一路フィンランドの首都ヘルシンキへ、ヘルシンキで乗り継ぎの飛行機を待つこと3時間。時間があったので、ヘルシンキ空港の辺りを散策してみた。ちょっと雪が積もっているが、一見普通の空港。

しかし、しばらくしてとんでもないことに気がついた。

「看板に書いてある言葉が一つもわからない。」

フィンランド語は、使う文字は基本的に英語と同じアルファベットだが、その単語が一つ

もわからない。よく考えたら、普段日本に住んでいて、たまには英語の看板は見かけることはあるが、意味の分らない看板というのは、ある意味新鮮な経験だった。

さて飛行機を乗り継いで北極圏の街、キッティラへ。もう日はとっぷり暮れているが、キッティラ空港に降り立った瞬間、もう一つ、とんでもないことに気がついた。

「どえりゃーさっぴー。」

(編註：名古屋弁で「すごく寒い」の意。あまりの寒さに、つい方言が出てしまったものと思われる。) 雪が舞っているが、なんだかわからないけどすごく寒い。その夜、早速ホテルからオーロラを見に外へ出るとき、部屋にあった、マイナス10度まで測れる温度計を持っていった。ところが、その温度計は割れてしまった。

「もしかしたら、バナナでクギが打てるかもしれない・・・」

なぜか、ふとこんなことが頭に浮かんだ。

その夜は、オーロラらしいものは見えたが、うすくて雲みたいな感じだった。でもオーロラが暗い空に光っているところは、テレビで見たものとも、聞いた話から想像していたものとも、ぜんぜん違っていた。

「え、オーロラって、こんななの？」

これがそのときの率直な感想だった。でも、それは決して拍子抜けしたのではなく、今まで具体的なイメージのわからず、神秘的な抽象だった「オーロラ」が具体化した瞬間でもあった。

さて翌日、早速近くのスーパーマーケットへ足を運んだ。バナナとクギを買うためだ。ついでにマイナス50度まで測れる温度計も買って来た。でもこれを買った後は、昼間はオーロラが出るわけでもないの、少々散歩をしたあとは、夜に備えて仮眠をとっておく。

その夜、幸運なことに晴れていた。オーロラの光は淡いので、曇っていると見えないのだ。早速バナナとクギと温度計を持って外へ出る。冬山用の靴に厚手の靴下2枚重ね、ジーパンの下にジャージ2枚、上はシャツの上にトレーナーとセーター、更に冬用の厚手のジャケット、冬山用のまるでガンダムの手みたいなごっつい手袋と、銀行強盗でもできそうな、顔がすっぽり入る覆面。こんな格好で外へ出ても、2時間もすると寒くていられなくなる。



Photograph by Junichi Akita

バナナを触ってみると、固い。早速、クギをバナナで打ってみた。

カーン、カーン。

バナナでクギが打てた。温度計はマイナス20度を指していた。本当にバナナでクギが打てる世界があるんだ。これも、オーロラと同じく、今まで具体的なイメージのわからない、CMの中の遠い世界のできごとだったことが、具体化した瞬間でもあった。



結局キッティラに滞在した4 「氷点下20度の世界ではバナナでクギが打てます」の凶

日間のうち、3日間オーロラを見ることができた。この時期にしては、ずいぶん運のいい方らしい。

キッティラの後、ロバニエミという街とヘルシンキで一泊ずつして、最終日の午後、ヘルシンキの空港のロビーで飛行機を待っていた。日本行きの飛行機ということもあって、まわりには日本人が多い。ふと、キッティラでオーロラを見て、バナナでクギの打てた夜のことを思い出した。

でも、なぜか、遠い昔のことのような気がする。

1年前にヘルシンキの空港で、一つも意味がわからない看板に驚いて、キッティラでオーロラを見てバナナでクギを打っていて、今、「去年のオーロラツアー、よかったねー」なんて話をしているような、そんな気がする。

やっぱり、フィンランド語の看板も、オーロラが見えた夜も、バナナでクギが打てたことも、夢のなかのことだったのだろうか。

きっとこのオーロラを見たことを、具体的に表現することは無理のような気がする。抽象的なイメージが具体化する瞬間というのは、実際にその抽象を見る以外に方法はないのかもしれない。

家に帰ると、カバンの中にはお土産やとった写真と共に、クギと温度計が入っていた。